

## 柴北川プロジェクト通信 29号

～番外編・合馬地区合同視察～

平成25年3月2日（土）

## 1. 初めての合同視察を、たけのこの里・合馬で！

平成21年から取り組み始めた柴北川プロジェクトも4年目となり、当初の山桜資源調査から山桜周りの竹除伐、さらに除伐した竹の活用、そして竹林の整備へと、年を追って「竹」資源を活用した地域づくり活動を深化させてきました。

その「竹」資源活用による地域づくりにおいては、我々共助研のメンバーの大半が住む福岡県内に、全国的に名を馳せた先駆的な取り組み事例があります。北九州市の小倉都心部から車で約30分に位置する、小倉南区合馬（おうま）地区の取り組みです。

「合馬のタケノコ」と言えば、今や高級タケノコの代名詞となる有名ブランドとなりましたが、このどこにでもある地域産品を全国ブランドにまで仕立てあげた合馬地区の地域づくり活動は、農山村活性化の代表的な成功事例として広く知られています。

梅花もそろそろ盛りを過ぎようかという3月2日の土曜日に、「柴北川を愛する会」と共助研による初めての合同地域視察として、この合馬地区を訪れました。

## 2. きっかけは、コミュニティ政策学会福岡大会に向けた下見から

昨年12月の年の暮れ、事務局の波木は、所属する北九州市内の会社から車で30分足らずの「合馬農産物直売所」に出向き、合馬校区まちづくり協議会の清永賢治会長にお会いしました。本年7月に予定されているコミュニティ政策学会福岡大会（@西南学院大学）で、中山間地域分科会におけるパネラー参加を、清永会長に依頼するためです。

清永会長は、北九州市役所退職後に故郷合馬地区に戻り、その後12年間、同校区まちづくり協議会会長等の要職に就かれながら、合馬での地域づくりの先頭に立って活動されている方です。在庁時代には、主に土木関連部局で市内の道路・河川整備等を担当されており、当会が建設コンサルタントを主体とする組織であると聞いて快く会っていただきました。



清永会長

“折角だから地元も見たい”との有難い申し出をいただき、会長のご案内で約1時間半地域内を回りました。その際に強く感じたことは、南北を山地が囲み東流する合馬川沿いに細長く形成された盆地地形と、山すその集落や田畑がつくる山里の雰囲気、柴北川Pの長谷地区と何と似通っているか、ということです。さらに、地元の竹資源活用を進めている点では、長谷地区が目指す地域像を先取りしている地区でもあり、様々な観点から長谷地区にとって大変参考となる地域ではないか、ということでした。

その場で早速、清永会長に「柴北川を愛する会」のことを紹介し、可能ならば視察をお願いしても良いかと問いかけたところ、即答で承諾していただきました。

後日、この視察のことを「愛する会」の渡邊事務局長に持ちかけたところ、昨年の当会吉田会員による勉強会以降地域産品開発の機運が高まっていることもあって、是非実現したいとの回答をいただき、今回の視察に至った次第です。



合馬地区の集落風景

### 3. 霧雨模様も、午後には回復。そして、見事な美竹林に一同感動！

「柴北川を愛する会」の視察メンバーは、穴見会長、赤峰副会長、渡邊事務局長、高野会員、若杉会員の5名。当日は、ワゴン車をレンタルして早朝7時に意気揚々と長谷を出発し、昼前には当地に到着して少し下見もしたとのことで、かなり気合がはいっています。

一方、今回は受け入れ側となった共助研メンバー5名（木寺、玉田、波木、矢ヶ部、山下）は小倉駅北口で合流し、こちらもワゴン車で「合馬農産物直売所」に向かい13時30分に「愛する会」と合流しました。

一同は、この直売所で初めて清永会長にお会いし、以降、清永会長ご自身の作成による視察スケジュールに沿って地区内を約3時間かけて視察しました。

当日の天候は、前日までの寒気は和らいだものの、朝から生憎の霧雨模様。視察途中にも少し雨となる時間帯もありましたが、地区の実情を熱く説明していただく清永会長と、興味深々で視察する両会メンバー全員の熱気に押されてか、15時頃からは陽も射し始め、夕方には青空が広がるまでに回復しました。



直売所で清永会長からあいさつ

#### ●清永会長直々の案内による3時間の視察

約3時間に及んだ地区視察のスケジュールは以下の通りです。この間の視察模様を、写真とともに紹介します。

#### 合馬地区視察スケジュール

- 合馬農産物直売所に集合・あいさつ（13:30）
- ⇒北九州市立合馬竹林公園視察（13:45）
- ⇒生産竹林視察①（14:00）
- ⇒定住者受入れ団地（ルアーヂ合馬）視察（14:20）
- ⇒農林業サポートNPO「農甦の会」事務所視察（14:35）
- ⇒竹炭焼作業所視察（14:40）
- ⇒生産竹林視察②（15:00）
- ⇒復元の森視察・ふもとから望む（15:30）
- ⇒三岳梅林公園視察（15:45）
- ⇒地場野菜栽培ビニールハウス視察（16:00）
- ⇒三岳公民館にて意見交換会（16:30～）



▲合馬竹林公園内の展示館で、廣瀬館長から説明を聞く。竹林公園は北九州市立で平成8年に開設。以後、地元イベント会場や交流施設として活用され、地区のシンボル施設に。



◀直売所近くにある西欧風のアパート群。市住宅供給会社による賃貸アパート「ルアーヂ合馬」で、地区外からの定住家族19世帯が住む。

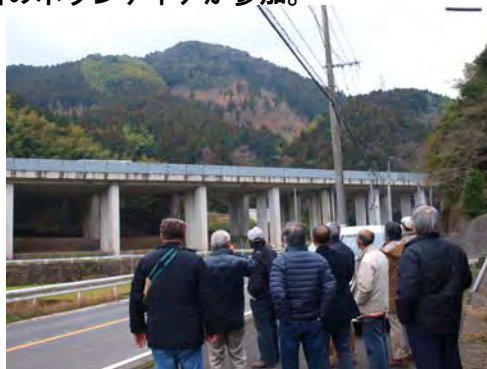


▲山すそのサイクリングロードに沿って整備された生産竹林。合馬地区の世帯数220戸の約半数107戸が「合馬たけのご振興会」に所属してタケノコ生産に携わる。



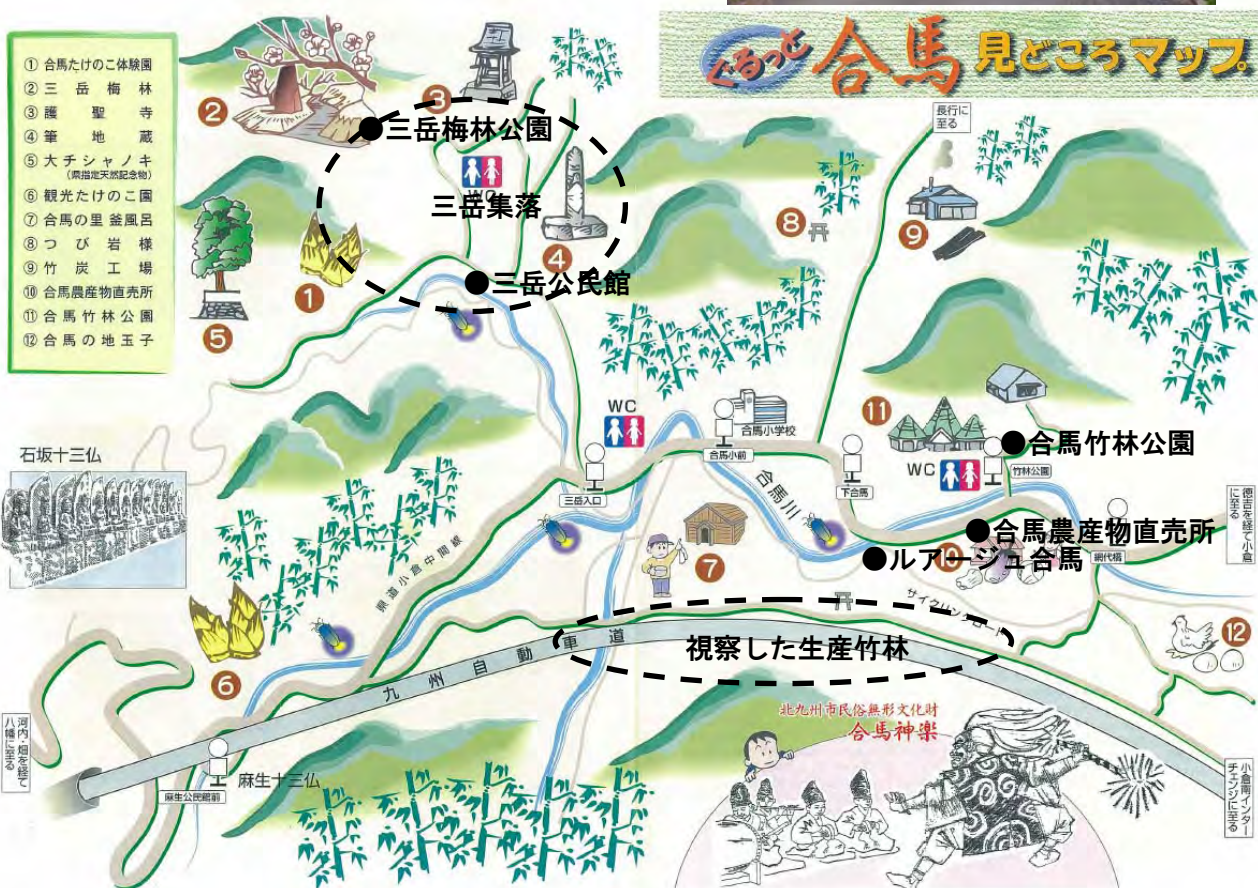
▲生産竹林のひとつに足を踏み入れて、赤土客土、竹炭・わらによる土壌改良された竹林の見事さに一同圧倒される。参加者の中には直近の週に八女市での竹林現場を視察した者もいたが、合馬の方が美しいと絶賛。

▼視察前の2月24日(日)に実施された「復元の森」活動の現場(前方の山の山腹部)を見る。急傾斜地の放置竹林50aを伐採し、クヌギの苗木1500本を植えて植生復元を目指す。活動には約100名のボランティアが参加。



▲三岳梅林公園の入り口近くで、農産物販売をしている地元の方々や来訪者に話を聞く。この梅林に連絡する周回道路の整備が、地区全体のむらづくりのきっかけとなった。

▼赤瓦の屋根が美しい三岳集落を散策する一行。清永会長のお兄さんから、永年培ったハウス野菜栽培の現状を説明してもらう。つい先年までは、小倉牛の畜産活動もされていたとのこと。



#### 4. 活発な質疑で、予定を超える1時間半の意見交換会

中味満載で3時間に及び現地視察を終えた一行は、三岳地区の公民館に到着し、広い畳の間に通されて一息入れた後、視察での興奮を引きずりながら地元の方々との意見交換会に臨みました。

合馬地区からは、清永会長を筆頭に地区を代表する4名の方々に参加していただき、先ずは自己紹介をしていただきました。

##### ●清永賢治会長（合馬まちづくり協議会会長、振興部会会長）の自己紹介

三岳地区の生まれです。北九州市役所に入所して40年間土木部局に勤務し、定年退職後に帰ってきて12年間活動しています。

合馬校区は人口760名で220世帯、集落は7町内あります。平成18年から市の制度としてまちづくり協議会が小学校単位で発足しましたが、平成8年に発足した合馬むらづくり協議会（現在は協議会内の振興部会）がその前身です。

むらづくり協議会発足のきっかけは、三岳梅林への周回道路を整備する「ふるさと農道事業」の取り組みからで、道路整備だけでなく「むらづくり」の協議会も作ろうと各町内の役員で話し合って結成しました。

むらづくり協議会結成後、タケノコのブランドづくりに取り組み、平成17年に国の農林水産業まつりで内閣総理大臣賞、平成21年に「豊かなむらづくりのモデル」として農林水産大臣賞を受賞しました。また、放置竹林が多いと言うことで、7年前から「復元の森」事業を進めています。

##### ●清永義弘さん（会長のお兄さん。82歳ながらすこぶるお元気）の自己紹介

昭和33年から大分の玖珠市場（子牛の市場）で購入した小倉牛の畜産を始め、平成23年12月まで30頭を飼育していました。現在は、水田1haとハウス栽培とタケノコを兼業でやっています。

##### ●高木美智子さん（合馬農産物直売所の店長。直売所立ち上げ時からずっと関わる。）の自己紹介

今年はタケノコが遅くて直売所での品物が少ないのですが、かわいい店員さんはいましたか？私は、直売所が出来た時から関わっているので、直売所のことは誰よりもよく知っています。

17年前に合馬地区内の石坂集落に帰ってきて、農業に関連することで何か出来ることは無いかと勉強して、今は、口で百姓をしています。（笑）直売所で聞かれたことは、大体答えられるようにしているつもりです。今は野菜ソムリエの免許にもチャレンジしていて、合馬に多くのお客さんに来てもらいたいと、努力しています。

##### ●明石久美子さん（梅加工品の生産・販売をしている「梅の里工房」の代表。）の自己紹介

「梅の里工房」は、三岳地区の主婦10人で立ち上げた任意団体です。主婦と言ってもお嫁さん世代の50～60歳代で構成しており、始めてから17年です。

工房を何故始めたか。合馬地区は市街化調整区域で田畑の売買ができない地域ですが、車で30分で小倉市街地に行けるので、嫁いできたお嫁さんがみんなパートに出てしまいます。

ところが、両親が高齢になって田畑仕事をしなければなくなったときにパートが出来ない。そこで、県の普及センターからの指導もあって、“農閑期に、農業を手伝いながら実収入が得られれば、パートに行かずに済む”として発足しました。



公民館での意見交換会



左から清永さん・明石さん・高木さん

さて何をしようか、ということで 2~3 年試行してみましたが大うまいいきません。そんな時に、観梅客の多かった三岳梅林を、市の補助金をもらって観梅時期だけ市の公園として無料開放することとなりました。ただし、梅の実が地元で使ってよいとのことだったので、それでは梅の実の加工品をつくろう、と始めました。

その時は、既にお姑さん達が梅林公園の前で梅干しとか漬物とかを売っていましたので、なるべく競合しないものということで、ドレッシングと梅の酢味噌で立ち上げました。

最初は試行錯誤をしながらでうまくいかなかったのですが、6 年前に商工会議所による「北九州の食のブランド」の公募があって申し込みをしたところ、認定されました。

私たちは農家の主婦なので、自分達の家族に食べさせても安全安心なものを作っています。「どくだみ石鱈」も肌の弱い人達が使っているいいものとして作りました。“自分達が食べても使っても安心なもの”が私たちのコンセプトです。最初の頃は、直売所とか農協とかにしか置いていませんでしたが、今は少しずつ広がって福岡の SC とか小倉の百貨店とかにも置いてもらっています。

## ●意見交換会の様子を詳しく

続いて「愛する会」と共助研のメンバーが自己紹介をして、質疑の時間となりました。内容の濃い質疑となりましたので、少し長くなりますがその全容を紹介します。(Q は質問)

**Q** 梅味噌や梅ドレッシングは我が家でも 10 年くらい作っています。梅の中に薄口醤油を入れていて、それ以来酢は買ったことがありません。こちらでは、中に別なものとかを混ぜているのですか。

### 明石さん

何の加工品を作るかということで、タケノコやししとうで試してみたが大うまいかず、梅はいっぱいあるので梅味噌やドレッシングを作ってみました。これをただで食べてもらうのであれば文句は言われませんが、自分で美味しいと思えばそれでよいのです。しかし、人に商品として売るのは、10 人のうち半分ぐらいの人から美味しいと言ってもらえなければいけない。だから、個人の意見ではなく、酢味噌もドレッシングもいろいろな人に試食してもらいました。

外に出していると発酵したりします。梅味噌は、梅がすごく強いのでどんどん梅の味が進んでいって、最後には梅と酢の味しかなくなる。それを丁度よい所で止める方法をいろいろと試行錯誤して、あまり発酵しないように研究したりとかしました。

ここには加工所がありません。この場所は三岳の皆さんが出資して作っている類似公民館ですが、会議の時にしか使っていないので、ここの台所を使わせてもらっています。食品加工にはいろいろと規制があるのでそれらをクリアして、一般の人にも認めてもらうように工夫しながら進めています。

**Q** 私たちは平成 18 年に任意団体を作りました。ここと似たような地区ですが、なかなかひとつにまとまりきれません。会員は 96 名ですが実際に活動に関わっているのは 20 名前後です。地区全体が大うまいとまるような方策はないでしょうか。合馬地区はよくまとまっているようですが。

### 清永会長

共通の悩みがあります。合馬まちづくり協議会には 45 名ぐらいいますが、20 名ぐらいいの人が理解があって熱心です。

まちづくり協議会には、あらゆる団体（自治連合会、自治会、社会福祉協議会、消防団、子供会、体育委員会等）が全部入っています。昔からの 7 自治会が構成員となっている自治連合会がそのままあり、社協もいろんな団体が入っており、保健福祉、民生関係の民生委員、児童福祉委員等の方々もみんな兼務で、一人が三役四役をやっています。活動で出ることも多いし会議も多いのです。

一見まとまっているようですが、部会が、安全安心部会、社会福祉部会、生涯学習部会、地域振興部会とあって、例えば地域振興部会は昔のむらづくり協議会で今のまちづくり協議会とダブるところが多く、役員も共通しています。

何十名と言っても実際は 20 名程度で動かしており、10 年も 20 年もやった方が高齢になってきていて、早く引退して若い人に引き継いでいかなければならない状況にあります。

Q 我々の地域には「長谷総合開発協議会」という組織があり、自治委員（区長）や民生委員、婦人会長、消防団長などの各団体の役員が集まって構成していますが、なかなか機能しなかった時期がありました。そういう時期に、たまたま個人的に関心を持つ者が集まって“地域内を流れている川が昔に比べて汚くなっている”と話し合っ活動を開始したのが我々の組織化のきっかけです。そのような団体とこちらの組織との違いが、差として出ているのかと感じます。

#### 清永会長

以前の「合馬むらづくり協議会」的な形で「愛する会」を立ち上げられているように思います。

「愛する会」の紹介資料をいただき活動内容も見させていただきましたが、荒れた竹林の伐採とか公園づくりとか竹炭づくりとか、特に花をたくさん植えておられる。田植えもして、そばの花とか花いっぱい運動をかなりやられている。そのあたりは、合馬にはありません。

今は先ず、むらづくり的な団体になっていると思います。それはそれで趣旨を理解される方にさらに輪を広げていくことがいいと思います。今の「合馬校区まちづくり協議会」のように、いきなり全部の団体を集めて、同じ方向でやると言うのは非常に難しいと思います。

合馬では、40歳代、50歳代、60歳代の方々にいっしょに活動に入ってもらいたいのですが、みなさん個人としての生活が第一で、自分の山、自分の畑・野菜、そして生計を立てないといけない。それでは、会議が多く土日のイベント等にも出たら家のことはどうするのか、家庭も結構うまくいかないかありますが、みなさんそんな中でやってもらっている。

合馬でも専業農家は55%ぐらいです。65歳以上の高齢者は760人中100名いかないぐらい。老人会では、みなさん現役で働いています。家のこと以外で、子や孫のために合馬の将来を考えて協力しようという人は少ない。みなさんいろいろと動いていただくが、今週なにかあって、また来週も違う団体でイベントや会議がある、とかいう人が多いのが実状です。

Q 合馬の農家で何割ぐらいが竹林を持っているのですか？また、その方達の中で、タケノコだけで生計を立てている方はどのぐらいでしょうか？

#### 清永会長

タケノコ農家は、会員に入っている方が100軒少しぐらいで、全世帯数（約220戸）の半分ぐらいです。みなさん兼業で、タケノコだけの専業はほとんどいません。

なかには観光タケノコ園をやっている人もしますが、シーズンとしては2月～4月頃だけです。

#### 明石さん

タケノコが多い時はかなり忙しくなります。だから、逆に農閑期というのが少ないです。

#### 清永義弘さん・清永会長

合馬における竹の歴史を紹介すると、今から40年前の八幡製鉄最盛期の頃、合馬地区が製鉄所内の石炭とかコークスを運ぶ竹製の「えぶじょうけ」（大分では「しょうけ」）の供給地でした。

私の祖父の時代、多い時には月に1万杯ぐらい八幡製鉄に納入していました。私も17の頃から5年間、馬車で「えぶじょうけ」を運んでいました。昭和29年頃からは車で運びはじめましたが、ここに30数軒の組合員がいて10日に1回ぐらいは運んでいました。

「えぶじょうけ」には「こし」（コの字型の持ち手部）がありますが、その「こし」が竹の元の方で二本ぐらいしかとれない。だから、炭を焼いた後には竹を植えたと聞いています。それで合馬地区には竹林が多く、50年前に植えたのが今に続いています。

田植えが済んだら野菜を作らず、100町歩ばかりある造林地の木を伐った後を手入れして、その後は「えぶじょうけ」を作っていました。野菜よりもそちらの方が確実ということで、終戦後の昭和20～30年頃はそういう状況でした。

今は合馬で約320haの竹林があり、そのうちの1/3が生産竹林です。最近では、竹のチップも買い取るようにしています。竹の原木が3円/kgです。3m50cmの長さに切ってコンテナに入れ、専門の業者が回収して買い上げています。

Q 先週、八女に視察した際に、第3セクターで5円/kgで買い上げるという話を聞きました。こちらでは、竹林のオーナー制度については取り組んでいるのですか。

#### 清永会長

3年前ぐらいに役所と話しして、テスト的に実施する予定にしていたのですが、農政部門と行政部門の調整がうまくいかず結局実施していません。

ただし、オーナー制とすると、一人が30坪などと区画して行いますが、3～5年ぐらいは辛抱しないと良いタケノコが出る竹林になりません。オーナーが、体力があって資金もあって5年ぐらい辛抱しないと出来ないということです。

契約を、市とオーナーと地主の三者契約でちゃんとやろうと段取りをしましたが、地主がオーナーを指導しなければならず、地主側にその余裕があるのか、オーナーが5年ぐらい辛抱してやりきるのかという問題もありました。市の方では、1区画5000円ぐらいの援助を出すのは良いとしてくれましたが、まだ制度としては確立していません。

いま、タケノコの生産農家が高齢化して、自分のもっている山も3つあれば1つしかできず、残りほとんど放置竹林になっていっています。オーナー制度は理想的ではありますが、現実的に出来るかとなると非常に難しいというのが実情です。

#### 明石さん

竹を切るのがどれだけ大変かは、なかなかわかってもらえません。それでも、それをしないとタケノコは出てきません。合馬では、肥料をやって草を切って、タケノコを育てているのです。

#### 清永会長

竹林は、3年置いておくとダメになります。タケノコ農園では、つるはしで掘ればイモのようにどんどん出てくるからいいなと思われていますが、皆さんが手入れをしてやっと良いタケノコが出るのです。オーナー制になるとすぐに掘れるように思いますが、そうはいきません。

放置竹林の枯れ竹を切って、一定の間隔を残して竹を切って、土壌改良をして土を入れる、などの手入れをしないと良いタケノコは出ないのです。

**Q** 今、自宅の竹林を「モデル竹林」に指定してもらい、皆さんと一緒に古竹を切って焼いたりして手入れをしています。まだまだ足りないという思いです。

#### 明石さん

ここには「農甞の会」という組織があります。その会の何人かのメンバーが、三岳地区の農家で勉強させてもらいながら竹林の一部を借りてタケノコを掘っています。普通の農家には及ばないかもしれないが、便利が悪い場所でイノシシと闘いながら、ちゃんと勉強して収穫しています。

#### 清永会長

合馬地区から転出してここに住んでいない地主の方達が、その農林サポーターに全部委託してやっています。

#### 明石さん

マチの人が、日頃はそういうところに入ることは無いのに、サポーターとして入っています。タケノコが掘れても掘れなくても楽しいらしい。

我が家は寺で、寺の裏山を他の人に管理してもらっていますが、やはり年に何回かは入って伐竹したり草刈りしたりで、タケノコ時期には掘っています。完全に貸してしまうのではなくて、手伝いながらすると言うことでやっています。

**Q** 「復元の森」事業のサポーター募集はどういう形で？

#### 清永会長

先週の24日に「復元の森」事業の7回目を行い、サポーターが100人参加しました。県の職員や市の職員、企業や一般市民の参加で、大体が5～10人、多いところは20人のグループで来ています。

市の産業経済局が、関連する農林業の団体を集めて「里山を守る会」という会議を持っていますが、そのメンバー全部に1か月前に郵送で案内を出しています。2年前ぐらいから活動していますが、我々の趣旨をよく理解していただき、5人とか10人とかで来ていただいています。

地元からは町内の世話をしている人が15名くらい参加しています。

また、北九大大生で直売所に実習で入っている人が7名と、学研都市の環境学を習っている学生が7～8名、教授も含めて14～15名が来てくれました。さらに共立大とか他の職業専門学校的なところも、里山に関心が強いものだから来てもらっています。

場所の選定が難しく、年々入る山が急斜面になってきています。地主の協力もいります。

**Q** 我々の地域は少し奥まった所にあつて、都市部の人々との交流の輪が広がればと活動していますが、イベント等では人集めとかが大変です。

また、地域の人々にも小遣い稼ぎとなるような産業が出来て、主婦がドレッシングで小遣いを得たり、お婆ちゃんが饅頭を作って元気になる、そういうことも考えていますが、地区地区でバラバラで苦労しています。

自分達の活動資金を稼げるようにと竹炭や竹チップづくりにも取り組んでいますが、すぐにはお金にはなりません。そういうことはあきらめて、地域の精神面での盛り上げだけでもやればとも考えたりしていますが、なかなか答えが出ないのです。

### 明石さん

それだと長くは続かないと思います。

このむらづくりはこの三岳地区から起こった活動ですが、何年か前まで三岳地区だけで「梅まつり」とかイベントを行っていました。それがだんだん高齢化していつて若い人もいなくなり、外の人に来てもらってふれあつたりすると元気になるのではないかと始めはそんな風に考えていました。

外から来てもらうために、イベントで梅まつりをしたり、豚汁をふるまったりとか、寺で精進料理を出したりとかして評判はすごく良かったのです。もうやめて何年か経ちますが、いまだに“精進料理のイベントはないのか”、“梅まつりはしないのか”という問い合わせがあるくらいで、至れり尽くせりのもてなしをしていました。

それでも結局、村の人にとってみれば忙しいばかりでした。来る人からアンケートを取ったら満点の返事をもたらうのですが、続けるためには村の人にもプラスとなる要因が無いとだめで、そこが一番ネックでした。当初は、とにかく来てもらえれば良いという目的だったのですが、最終的には、村で何か買ってもらうとかお金が落ちる仕掛けをしないと続かない、とわかりました。

### 清永会長

このイベントは、県の補助も多少もらって、グリーンツーリズムの一環として5年ぐらい取り組みました。村の有志が集まって、精進料理は1500円もらい、さらに500円ぐらいのお土産付きでやっていました。

### 明石さん

三岳地区は全員がお寺の檀家さんです。年に3回お寺の行事があつて、お齋を作るときにお婆さん達が采配をふるって若い人達に精進料理を教えているので、そういう形でお婆さん達に元気になってもらえば良いと始めたら、本当に評判が良かったのです。

だけど、続かない。地元とお客さんの両方が、うまくかみ合うような仕掛けを考えながらイベントに取り組んでいくと長く続きます。

「愛する会」の活動で、いいなと思ったのは、サポーターの方とアドバイザーの方などから外の意見が入ってくることです。私たちは地元でできる範囲でしか出来ないけれど、外の人はこのことを求めている、ということを経験した人から教えてもらえることです。

例えば、三岳地区に来た人は、お刺身は求めておらず山里の料理を求めているのに、地元の人はご馳走だからとお刺身を用意して、結局ミスマッチになってしまいます。イベントを組む時には、街中の人も呼んで意見を聞きながら準備して行く、こういうことがすごく大事です。自分達だけのひとりよがりのイベントだとどうもいきません。

### 清永会長

都市の人との交流の場として、まず直売所があります。常連のお客さん達が、直売所でいろんなことを教わって、ではまた行ってみようかと友達を連れてきます。そしてお客さんが増えた、

その延長線上で「たけのこまつり」を始めました。これも、行政を始めお付き合いしている地域の団体等のいろんなところに案内を出します。来賓として40名ぐらい。先にマスコミにも案内を流すので、一般市民の人も当日来ます。多い時には1000名以上。タケノコが入った若竹汁を大きい鍋で作って無料で提供します。それから出店をしてもらいます。タケノコ饅頭とか焼きタケノコとか、手作りのお菓子、野菜、タケノコなど14店舗ぐらいが出店します。

夏には小学校で合同慰霊祭と盆踊りをしています。また、正月明けには、校区全体でのどんど焼きなどで都市の人との交流を続けています。



Q 直売所を立ち上げた頃の話聞かせてください。また、タケノコのことも。

### 高木さん

竹林公園が出来た時に、お客さんが来るので1週間に1回テントを張って店を出しました。

最初は、市場に出した残りの野菜を出そうと、本当にテント一つで始めましたが、だんだんお客さんが増えてくる。毎回テントを立てていては大変だと言うことで、トラックの幌を屋根に張って少し広くしてやっていました。当時は本当に田舎っぽくて、お金の計算が合わなかったりとかありました。

今のところには、市役所に協力してもらって平成11年に移りました。電話もついて、週3日は開店する、ということでお客さんの信用度があがり、一時期はすごかったです。対応するのは地元の女性で、パートで働いてもらいピーク時には年間7000万円の売り上げでした。

その後、各地に道の駅とか直売所が出来て、お客さんも無理してここまで来なくていいのでは、となって減少しましたが。

一番売れている日は土曜日で、常連の人が朝から並んでいます。土日と続くので土曜日に残ったものが日曜日に回るということをお客さんも分かっています。水曜日には新しい品物が入ると言うことで、日曜日と変わらないぐらいにお客さんが来だしました。日曜日には通りがかりの人とかが来られるようです。

直売所で一番安定して売れているのはタケノコの時期で、年間の1/3の収入があります。売るだけではなく配送もあって、箱詰めにしたものをポンと売のではなく、お客さんが選んで送れるようにしています。だから、2Kgであったり3Kgであったり、詰められるだけ詰めて、最盛期には10Kgを北海道に送ったり。自分で見て選んで送りたいと言う人が多いので、すごく繁盛します。

今年はタケノコがあまり用意できそうにないので、そういう時は次の日に掘ったものを送っています。タケノコは毎日のことで、一度に生えてくるのではないのですから。

タケノコには、A B C Dのクラス分けがあります。土の中から出て来たものはBからCです。先にとんぼと言うのがありますが、これが開いてなくて黄色のものがAです。これが少しでも土から出るとすぐにグリーンになるとB、少しでも開いてくるとCです。

ただこれは形だけで、直売所ではあまり厳しい評価はしません。生産者が自分でつけてくる値段なので、目の肥えた人は良いものを選びます。合馬産であればいいと、Cでも送る人もいます。

店ではCであるとかにはこだわりませんが、見えないキズがあったりするの、中までキズがいつていると送れない、とかには注意しています。やはり、合馬ブランドのタケノコを送るので、雑なことはしたくないですね。毎日タケノコを素手で扱うので、御覧のような手になっています。それだけ大切に扱っているということです。

### 清永会長

直売所は、市役所の空港イベントとか小倉駅や井筒屋百貨店前のイベントとかに、テントを1~2張りして出店していて、焼きタケノコや生のタケノコを売って人気があります。今年もいろんなイベントに声をかけてもらっていますが、忙しくてなかなかいけません。

### 高木さん

タケノコは1年中あることを、ご存知ですか？

今の時期に手がけているのは、孟宗竹です。それから、破竹、真竹、緑竹、さらに四方竹（節があって葉が広がっている竹。）と続きます。その間、ずっと生があるわけではないので、干したタケノコとかもあります。

普通は茹でて乾燥させるタケノコをご存知かと思いますが、生で切って塩水につけて一晩寝かし、それを干します。そうすると、湯がいて干すものより一日は短縮できます。生干しということです。そして、一回水に戻し捨てて湯がく。生なのでアクがあるかもしれないので、茹でてそれを捨ててそれから炊く。茹でて干したものは3日ぐらいかかりますが、直売所のものはそうになっています。

ハウスを持っている人はトタンに載せます。少し日が射すと暖かくなるので2日ぐらいで乾き、イベントに持っていくとそれがすごく売れます。3%ぐらいの塩水できれいに仕上がります。貯蔵している間に気を付けないと茶色っぽくなるので、冷蔵庫に入れたりとかします。米用の冷蔵庫が空くのでそこに保管しておいて適当に詰めながら、販売しています。

**清永会長**

5月が過ぎて、タケノコが1.5mぐらいに伸びた時に、上1mを下から切って穂先タケノコとして真空パックで出荷しています。

**高木さん**

穂先タケノコは冷凍ができます。食べごろに切って砂糖をまぶして冷凍します。塩をまぶすと塩出ししなければいけません、砂糖だとそのまま使えます。そのまま鍋に入れて弱火で。砂糖がタケノコに浸みていくのであと醤油で。冷凍する場合は、穂先が一番良いのです。

穂先タケノコは何にでも合いますよ。合馬のタケノコは天ぷらとかは生でします。アクが無いので、生をスライスしたまま天ぷらにします。私もよそから来た人間なので、タケノコはえぐいと思っていたのですがびっくりしました。

実は、私はいまだにA品を見つけることはできないのです。(笑)

**Q** 耕地面積は145haとありますが、水田と畑の割合は？ 冬の雪はどうですか？

**清永会長**

このあたりは棚田が多かったのです。むらづくりを始めた頃から、まず基盤整備をしなければと各地域で田を広げたので、稲作等の農機具による効率化が進みました。現在、畑は一割ぐらいで、水田がほとんどです。

雪は、自分達が子供のころは20cmぐらい積っていましたが、そんなに何日も残ると言うことはありません。昨年も、3月頃に山に行くと、雪をかぶって竹が地につくくらい曲がっていることもありました。

**5. 活発な質疑は、夜の懇親会にまで続く**

ふと気付くと、外は夕色に染まり始め、時刻も予定を大きくオーバー。まだまだ聞きたいことが、語りたいたことが、という雰囲気でしたが、とりあえず全員で集合写真を撮ってお開きとしました。

「愛する会」の皆さんは小倉駅近くに宿をとっておられたので、一旦小倉駅近くに移動し、近くの居酒屋で参加者全員での懇親会をもちました。この懇親会には合馬から清永会長にも駆けつけていただき、地域づくりの苦労話や成功談を肴として意見交換会第2ラウンドが夜遅くまで続きました。

「愛する会」の皆さんには、翌日、小倉のマチやレトロな門司港めぐりで大いに英気を養って帰路につかれたとのこと。春先の3月に仕込んだ滋養がじわじわと皆さんのエネルギーとなり、今後少しずつ開花していくことを切に念じて、合同視察の顛末報告とさせていただきます。

◆後日談：この時の英気が早速に実を結んだのか、4月の豊後大野市市議選で赤峰副会長が見事当選を果たされました。赤峰市議のご健闘ご活躍を切に願っております。ただし、あせらず力まず、いつものマイペースで。

(文責 波木)



三岳公民館にて